



GUNMA INNOVATION AWARD

中国・上海研修特集

群馬イノベーションアワード(GIA)の中国・上海研修が4月22日から6日間行われ、関係者39人が発展著しい現地の情報通信技術(ICT)を肌で感じた。生活の至る所にスマートフォンの活用が浸透し、無人型や体験型の店舗に刺激を受けた。参加者はイノベーションへの理解を深め、自らの事業に生かすことを誓った。(報道部 宮村恵介)

ICTの発展 間近に

GIAの海外研修として中国を訪れたのは初めて。一行は国際金融都市の一つであり、創業ブームも起きている上海に足を運んだ。GIA2018の受賞者7人を始め、ぐんまプログラムで最高賞に輝いた共愛学園前橋国際大の学生3人も参加した。研修はITコンサルティング会社「ビービット」の藤井保文さん(34)が案内した。

70社が2社に
シェア自転車の体験では一時期70社も乱立した企業が、実質的に「モバイク」「ハローバイク」の2社に選別された状況を見学した。生き残りたつ社はスマートフォンアプリを使いやすくしたり、自転車のサドルを乗りやすく改良したりするなど改善を続け、支持を得てきた戦略も学んだ。

実店舗やクレイジーム、自動販売機でのスマホ決済サービスの体験は、決着後にクーポンや情報がスマホに届く仕組みを試した。ICTの発展で企業と顧客がネットを通じて継続的につながることが可能となり、「エクスぺリエンス(体験)」を提供し続けることがネットと現実を融合させるビジネスで鍵を握ることを目の当たりにした。中国のIT大手アリババが運営するネットスーパー「マート」も訪問した。店舗から3キロ以内の顧客に30分で配達するため、青いトレーナー姿の店員が店内を足早に行き交い、新鮮な野菜やエビ、野菜を忙しそうに籠に入れていた。生きた魚介類はその場で調理して食べられることもできる。店舗では「体験」が重視され、ネットでは「店舗」による相乗効果を生かす戦略も学んだ。



体験型を導入したナイキの旗艦店を訪れた参加者



自動販売機のQRコードを使って決済をする参加者

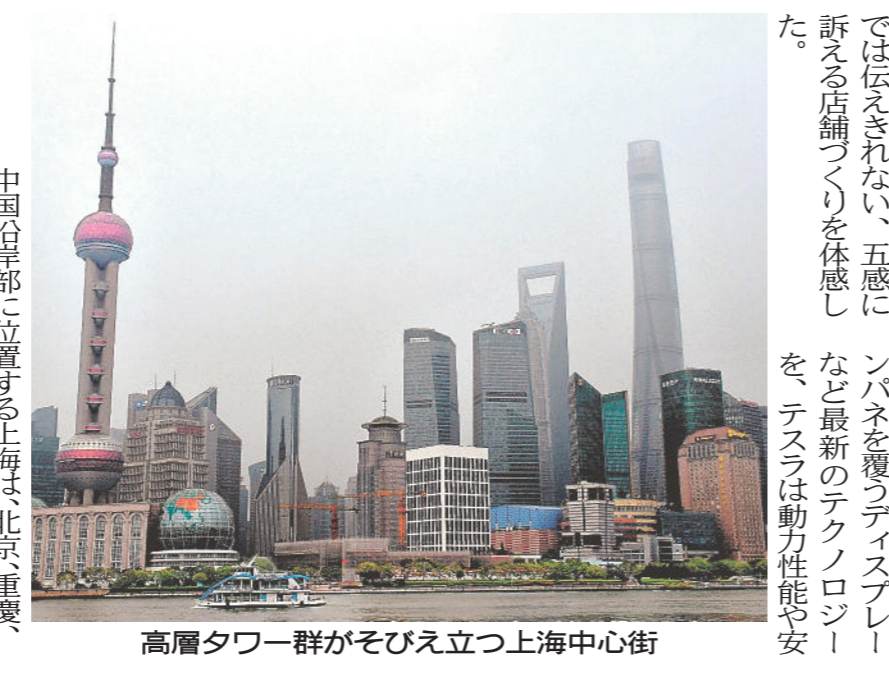
EV分野として、中国企業の「NIO(ニオ)」「BYTON(バイトン)」、米企業「テスラ」の3店舗を訪問した。ニオは自動車に搭載されるAIアシスタント「ノミ」を核に、家族の笑顔や楽しい雰囲気をつくる。バイトンは無人レジで決済



シェア自転車に付いているQRコードを読み込み解錠する藤井さん(左)

スマホ浸透 体験も重視

上海ってどんな都市?
中国沿岸部に位置する上海は、北京、重慶、天津と並び中国直轄市の一つ。人口約2400万人。2017年の域内の総生産額は4464億(約49兆円)で、タイの国内総生産(GDP)4554億に匹敵する。地下鉄が発達し、総延長は673キロと東京の2.2倍で世界1位。高さ150層以上のビルも多岐にわたる。高層ビルに上り下りする。国際金融の中心地の一つで、金融機関1491社が拠点を置く。スタートアップ向けのイベントも数多く開かれ、創業ブームも起きている。企業価値が10億を超える非上場企業(ユニコーン)は164社(2017年)を上回る。



高層タワー群がそびえ立つ上海中心街

では伝えきれない、五感に訴える店舗づくりを体験した。パンパを覆うディスプレイなど最新のテクノロジーを、テスラは動力性能を

総生産額、タイに匹敵
さも東京を上回り5位につける。国際金融の中心地の一つで、金融機関1491社が拠点を置く。スタートアップ向けのイベントも数多く開かれ、創業ブームも起きている。企業価値が10億を超える非上場企業(ユニコーン)は164社(2017年)を上回る。

ITコンサルティング会社「ビービット」藤井さん講義
研修を案内したITコンサルティング会社「ビービット」の藤井保文さんは、上海市街地での体験に座学を積みながら生活に浸透する情報通信技術(ICT)の現状とその背景や意味合いを分かりやすく解説した。藤井さんはアリババと「テンセント」という中国のIT2強がスマートフォン用アプリで数多くのサービスを手掛け、上海ではアプリだけで衣

地下鉄の通路に、無人のカラオケ店やパン店、シェア傘などが設置されている様子も興味を引いた。無人レジコンベアでは自分商品のバーコードを読み込んで決済する仕組みがあることや、店員がレジに時間を割けない分、顧客対応や店内調理の商品に力を注げるようになってきている様子も見学した。

中国の経済事情について説明する小栗所長
ASEANと別次元の経済
現地では日本貿易振興機構(JETRO)の小栗所長が、ASEANと別次元の経済規模を世界各國と比較して説明。東南アジア最大のインドネシアより経済規模が大きい省が広東省など三つあることに触れ、「中国の経済規模はASEAN



GIA-GPA受賞者
「変革速く面白い」「日本に伸びしろ」
「群馬イノベーションアワード(GIA)2018」で大賞を受賞して研究に参加したARIGATO COMPANYの松本健(右)と、高田幹(左)は上海は変革のスピードが速く面白いと感じた。高田さんは現地のICT事情に触れて日本に伸びしろがあることが分かったという。卒業後はIT企業に進むけれど学んだことを生かして日本を面白くしていきたい」と意気込んだ。

熱心に講義を聞く福島さん
講義を受ける共愛学園前橋国際大の松本健さん、高田幹さん、田部井沙樹さん(左)も参加。カラ



GIA上海視察団 肩書・敬称略
腰高博(出町典之、東原正樹) 以上コシダカホールディングス) 広瀬一成(アサヒ商会) 柴崎大海(うすい) 五日市一訓(エイチ・アイ・エス群馬営業所) 串田洋介(シダ工業) 江黒太郎(クスのマルエ) 金井修、皆川義孝(以上クライム) 松本健(グルメフレッシュ・フーズ) 雅楽川陽子(COCO-LO) 大本寛(セントラルサービス) 渡辺辰吾(ソウフ・ディライト) 榎本太平(タカラコーポレーション) 中島慎太郎(中央カレッジグループ) 小林新一(花助)

現実とネット融合が鍵

食住のほぼ全てが完結できる現状を紹介。保険会社などの既存企業も、健康管理や医師紹介のアプリ配信で、実際の保険とネットを融合して存在感を増しているとした。学歴や職業情報、ネット上の行動を基に個人の信用力を点数化する「ジーマクレジット」(芝麻信用)や、料理の配達サービスで早くきれいに配達すると点数が増える報酬が上がる仕組みがあることを説明。「ポケモンGO」同様に、芝麻信用も配達サービスも、ゲーム感覚でスコアアップに挑戦している。中国人の感覚を表現した。中国の消費者は料理やコーヒーを飲食する際に、ネット経由で宅配や店舗での受け取り、店内での飲食をオンラインに結びつけていると指摘。「消費者はその時に便利な方法を選んでいるだけ。便利か、楽か、使いやすいかという体験品質が生き残りを決める市場になっている」とした。

日本企業はオフラインを主に考え、オンラインで価値を付ける考えがまだと、中国ではデジタルがオフラインを飲み込み、デジタルのない世界はなくなったと解説した。ネット経由で消費者と企業が常につながり、行動データが把握できるよ